



Connect Edge

1000年後に傳れる堤防のあり方

東北の沿岸に建設が進む堤防をまちの観光資源として活用する事を考え、堤防のあり方を再考した。従来の堤防の考え方である「隔てる」から「結びつける」ということを軸に、地域産業・観光・継承という視点から、インフラ施設の地域資源化とブランディングを目標とした新しい土木提案。

基幹産業と景観との連関

気仙沼湾は牡蠣と帆立などの養殖が盛んであり、海に浮かぶ大量の養殖浮きがこの海の豊かさを象徴した景観である。東北ではごく当たり前の養殖浮きにLEDを取り付けイルミネーションとして新たな観光資源を生み出す。内陸側にはそり立つ堤防壁面には景観の模倣材として"漁網"をファサードとして利用する。漁業産業の特色を内陸側に展開する。

観光としての展望

計画地は宮城県気仙沼市前浜地区にある防波堤の一角。主要駅からの距離が3km以内に位置しているため、自転車を主な移動手段とし、堤防沿いをサイクリングロードとして活用する。また、沖合では基幹産業である養殖浮きを生かしたイルミネーションを掛け合わせ、夜の観光地として新しい魅力を生み出す。夜間観光是に相乗しつつある旅館やホテルへの宿泊者の誘致を打破する可能性を秘めている。

継承のカタチ

堤防という土木構造物は、何百年も残る謂わば「遺構」でもある。1000年周期の大津波を予測へ伝える為、堤防を"記憶を継承する"コミュニティハブとして活用する。

Site Area

